

＜糖尿病性腎臓病＞

今回は、糖尿病性腎臓病について、順天堂大学医学部腎臓・高血圧内科のホームページを紹介します。

糖尿病性腎症は、糖尿病の細小血管合併症（腎症、網膜症、末梢神経障害）の1つであり、糖尿病の罹患後10～15年以上経過してから発症することが多いとされています。

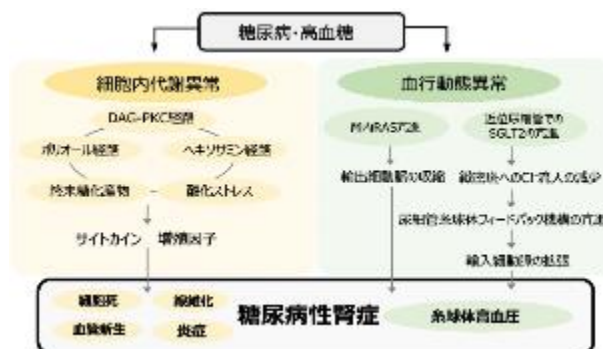
1998年以降、糖尿病性腎症は慢性糸球体腎炎にかわり血液透析導入の原因疾患の1位となり、増加の一途を辿っていましたが、近年ではその傾向は段々鈍ってきています。

治療の中心は、食事療法、血糖・血圧・脂質コントロールです。

糖尿病性腎臓病は、たんぱく尿が出現したのちに腎機能が低下する古典的な糖尿病性腎症に加え、たんぱく尿は少量で腎機能のみが低下する非典型的な糖尿病性腎症を含む概念です。高齢化に伴い増加してきています。



糖尿病性腎症の成因としては、下記の図のように考えられています。



初期には無症状である場合がほとんどです。進行すると尿中にたんぱく質が大量に漏出し、浮腫（むくみ）が出現します。腎不全になると慢性腎炎や高血圧などが原因の腎不全と同じように尿毒症症状（息切れ、貧血、食欲不振、全身倦怠感など）が出現します。

糖尿病の患者さんにおいて、たんぱく質の主成分であるアルブミンが尿中に30mg/gCr以上検出（微量アルブミン尿）されると、早期の糖尿病性腎症と診断されます。その後、たんぱく尿は徐々に増加して、多くは大量のたんぱく尿が尿中に漏れてくるようになります。

アルブミン尿（たんぱく尿）が多いほど、腎機能低下をきたす可能性は高くなります。また、腎機能低下は心筋梗塞などの心臓血管合併症を合併しやすい（心腎連関）とされ、生命予後に悪い影響を与えます。

主な治療法は血糖・血圧・脂質コントロールで、食事療法が基本です。厚生省糖尿病調査研究班により作成されに基づき、治療を行います。検査値や生活習慣を改善できるように、治療、指導します。

<花物語>

今回の花物語は、躑躅（つつじ）を取り上げます。

躑躅は、山野に自生しますが、観賞用として、公園、庭園などで栽培されています。晩春から初夏にかけて、紅、緋、紫、白、絞りなど合弁花を燃えたたせます。古くから、万葉集などにも暮春を代表する花として和歌に詠まれています。

躑躅分け親仔の馬が牧にくる 水原秋櫻子

日本大歳時記 講談社より

<土佐の風景>



<緊急時の連絡について> 体の調子が悪くなったとき、診療時間内で あれば、088-872-5500 に、夜間、休日の場 合は、090-8283-1525 に電話して下さい。対応いたします。

#入院の必要な患者さんへ

当院で入院が必要と考えられた患者さんは、高知赤十字病院、岡村病院に入院していただき、私が週に 2-3 回入院中の病院に出向いて、診察をさせていただき、病院の主治医の先生と相談しながら、治療を行います。*現在は、コロナ感染症の影響で訪問を自粛させていただいています。



城西公園の木々も若葉の季節となりました。いろいろな植物が元気になって、気持ち良い季節を作っています。

No. 337 2023 年 4 月号

<土佐の史蹟>

今回の土佐の史蹟は、尾戸焼について書いてみます。当院の前の道を400m位西に行きますと尾戸焼窯の跡という碑が見られます。そこで尾戸焼について調べてみました。



尾戸焼といえば、端正で薄作り、淡色の地肌に藍色の呉須（顔料）で絵付けされたものが代表的です。伝統的な絵柄の松竹梅や雲鶴、季節の草木や山水などが、繊細なタッチで描かれています。江戸時代は将軍家や諸大名への贈答品として用いられることが多く、主に作られていたのは茶道具です。民営化以降は、それらに加え、水瓶や大壺などの大物から、水さし、徳利、花器、皿など日用品も多く作られるようになりました。戦中、戦後は生活に密着したものがほとんどで、人々の暮らしが豊かになってからはまた茶道具を、という流れがあったと言われています。現在もその流れを汲み、二つの窯では茶道具と民芸品が作られています。少しずつ作風が異なり、優美でやわらかな印象の土居窯と、素朴で温かみあふれる谷製陶所、それぞれの魅力があります。

尾戸焼の歴史についてですが、承応二

(1653)年、当時の土佐藩主・山内忠義公の命により、大阪から陶工・久野正伯を招き、高知城の北に位置する尾戸（現在の小津町）に開窯しています。御庭焼（陶器に興味のある藩主や城主が窯を築いて焼かせた陶器の総称）として、制作されたのが始まりです。その際、陶土は良質な粘土が採れる能茶山から運んでいました。文政3（1820）年には能茶山に窯が移され、明治に至るまで約50年間、磁器の生産もされていたといわれています。明治に入ってから民営化され、能茶山周辺を中心に何軒か開窯されていましたが、その中で現在残っているのは、「土居窯」と「谷製陶所」の二軒です。それぞれの特徴をいかし「尾戸焼」の伝統を守っています。



なかなかいいですね。

＜散歩道＞

今回の散歩道は、最近の俳句を紹介しません。

訥々と妣より出づし原爆忌

妣は、亡くなった母のことです。母は、終戦の時、女学校の勤労働員で、呉の海軍工廠で働いていたようです。広島に原爆が落とされた時もきこ雲をみたそうで、それから一週間後に広島へ行って、悲惨な光景をみたようです。晩年まで、8月になるとこのことを話していました。

父の忌や十年変わらぬ法師蟬

父が亡くなったのは、十年前の夏でした。仕事が終わりに、岡村病院に入院していた父を見舞い、ローソンのある信号で止まっていますと、法師蟬が鳴いていました。何とも言えない寂しい気持ちになりました。十年経って、同じ場所に立っていますと、同じように法師蟬が鳴いており、当時のいろいろなことが蘇ってきました。

落蟬や終ひの一声残しをり

城西公園で散歩をしていますと、蟬が道に落ちていて羽をばたつかせ、最後にジジと鳴いて動かなくなりました。長い地中での生活を過ごし、蟬となって短い間、命の限り鳴き尽くした最後の一声だったのでしょう。草叢が目立たないところに移して葬ってあげました。

長子てふ穀の重さや秋深む

新美南吉のデンデンムシノカナシミの一節に「カナシミハ ダレデモ モツテ キルノダ。ワタシバカリデハ ナイノダ。ワタシハ ワタシノ カナシミヲ コラヘテ

イカナキヤ ナラナイ」というのがあります。誰も口には、出しませんが、哀しみを背負って生きていると思います。私もふとした時に長男ということが重荷になっていると感じることがあります。

しみじみと老ひを覚ゆる落葉時

落葉は、木の根元に落ちて、冬を越して、若葉のエネルギーとなる肥料になります。そんなことを考えていると自分の姿そのもののようです。何かにつけて、老いを感じるものです。一日の仕事を終えた時、昔は、こんなに疲れていたかなあと感じたり、歯の調子が悪かったり、いろんな場面で老いを感じます。

考妣いる夕餉浮かびし秋の宵

考妣とは、亡くなった父母のことです。秋の静かな夜に。少しアルコールが入ると、小学生の頃に、父母と食べた夕飯のことが思い出されます。夢の中にも、父母がよく出てきます。今朝も父と車を出してどこかに行こうとする夢をみました。

初夢や先師の問ひは次々と

先師とは、高知医大第二内科初代の太田文俊教授です。先生は、臨床に厳しく、特に教授回診では、次から次へ質問が飛んできて、それに答えるのが大変でした。30年以上の前のことですが、今でも夢に出てきて汗をかいているような気持ちです。

腰痛や生きてる証し翳雲

腰痛も老いの一つと思うのですが、生きているから痛いんだと思っています。ふと空をみると青空を背景に翳雲が浮かんでいました。自分の生きていることをよるこばなければいけないと思っています。